

# 家庭科の男女共修をすすめる会

※発行日 50. 10. 27 ※連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11

一部 50円

婦選会館内

TEL 03-370-0238

テーマ 「教育課程改訂と家庭科」  
日時 九月六日PM1・30～四・30  
報告 日教組中央教育課程検討委員会の  
「中間報告」について 和田 典子氏  
教育課程審議会の動向 半田たつ子氏  
「中間報告」の全文は、既に日教組機関誌  
「教育評論」7月号に発表されましたので、  
くわしくは同書を参照して頂きたいと思いま  
す。また概要はニュース167にも記しました。  
ここでは、集会の席上で出された質問や御意  
見とかかわって、二、三の点に関して補足し  
たいとおもいます。(教育評論を希望される

## 第九回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告

第九回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告  
◎第九回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告  
△テーマ「教育課程改訂と家庭科」(1)  
◎世界の動きから「生活の科学」を追究(4)  
◎家庭科の核に「生活の科学」を追究(6)  
I 教育科学研究大会での家庭科学研究I  
◎諸会合や会の活動から  
△家教連夏季集会から(6)  
◎日誌メモ  
・会に寄せられた声の中から  
・会計報告とお願い  
△母と女教師の会から(7)  
△会の第二号パンフレット「男  
女共修の家庭科で何を教える  
か」について(7)  
△教課審委員 東洋氏を尋ねて(8)  
◎日誌メモ(8)

…… 次回集会のおしらせ ……

### 第10回討論集会

テーマ 「社会教育の場からみた家庭科  
男女共修」

講師 立教大学教授 室 俊司氏

参加費 200円

日時 11月15日(土)

PM1:30～PM4:30

場所 婦選会館

渋谷区代々木2-21-11

TEL 03-370-0238

方は、新宿区中落合3-16-13 ホワイティビル内 日教組情宣局へ三〇〇〇円に送料二四円をそえて御申込下さい。）

#### 1. 家庭科の独立について

昨年、同じ日教組の「教育制度検討委員会」は、日本の教育改革を求めてのなかで、教育制度改革の基本構想を発表しましたが、そのなかで「共通教科をへらし」必修中心であった従来の学校教育を子どもの個性や自主性を尊重して選択教科をふやすこと、個別的な教科などで得た知識や能力を総合して、可能なかぎり現実的問題について追求する「総合学習」を新設することを提言しました。

右の視点から「現行家庭科の廃止」が打ち出されたわけですが、だからといって家庭科でとりあげてきた内容を否定したものではないことは「家族制度・家計・家族労働・保育などは総合学習においてとりあつかい、とうぜん男女共修となる」の記述からも明らかです。

しかし、前述の家庭科廃止論は、関係者たちの大きな反論をよび、特にその体質改善のために努力してきた多くの現場教師たちを痛く失望させました。また「必要な内容は技術科・総合学習に吸収してゆく」方針でありましたが、いざ実際の作業にかかってみますと

この点にも困難の多いことが推測されました。

他方、家庭科担当者より提出された実践の成果には著しい進展もみられる、そのほか「男女協同の新しい可能性」を徹底させてゆく必要性からいっても、保育、家庭、婦人問題を積極的に学習させねばならない、等々の事情もからんで、結局、独立の方向が採られるようになったとみることができましよう。

右のような問題状況は、職業高校の廃止、↓地域総合制高校の新設という提言が、あまりに現実をとびこえたものであって、現場の受け入れるところとならず、当面は職業教育課程の抜本的な改革にとりくむべきだとしている点とも共通しており「中間報告」をどう性格づけるかに深く関係するものといえますが、筆者としても教育全体のなかに生活や家庭・家族にかかわる教育をどう位置づけるのか、その見通しが立たない限り、現代の、いかにいかに危機状況のもとで家庭科の切りすては、決して国民の幸福にプラスするものではないと考えています。

#### 2. 家庭科という名称について

家庭科という名称は、女性を家にしづりつけ、せまい家事・裁縫の習得というイメージをあたえる。また、生活の問題は家庭の枠を

とりはらって、ひろい視野で考える方が発展的ではないか。そのためにも家庭科という

呼称はやめて、たとえば「生活科」と改めようという意見がありました。この点に關して「中間報告」では、現実に家庭がわたしたちの「いのちとくらし」を再生産してゆく拠点であり、しかもそこには、現在の資本主義体制と、その体制のよとの家族制度による規制がしっかり根づき、その拘束からくる矛盾に苦しんでいるのであるから、この現代的課題を視野に入れないような、教科にあっては困る。その意味からいってたとえば「生活科」とかえるよりも「家庭科」を受けついで方が、その矛盾をふくむ実体をより正確に表現できるのではないかと述べています。

#### 3. 用語にかかわって

「生命と生活の再生産」という用語に対して質問がありました。この語は大学家庭科教育研究会編「家庭科研究序説」明治図書村田泰彦氏論文の用語にならったものですが、原典はマルクスの「ドイツイデオロギー」と

きいています。それはともあれこの点をめぐ

っては前記研究会においてかなり時間をかけて討議した結果をうけ、筆者自身も現在の国民的な「いのちとくらしを守る」という課題とも重ね合わせて、この表現を積極的にとり入れ、用いました。ここでいう生命の再生産には自分の生命の再生産と次の世代の生産とがふくまれています。それだけでは、いわゆるくらしの概念がいまいちになってしまいますので、生活という語を並用した方が理解されやすいと考え、重ねて用いているわけです。

#### おわりに

現在、日教組では「中間報告」についての意見を聞くための集会を積極的にもっています。それが、それと並行して、教育内容の編成作業をすすめています。八月から家庭科部会も新たに設けられることになり、家庭科教育としてぜひこれだけという内容を選び出し、階梯毎に編成していますので、御意見のある方はぜひ「会」の方へ御下せ下さるようお願いいたします。

(和田)

#### 討論より

和田氏の報告のあと続けられた討論では、先ず和田報告の中の語について若干の疑義が出されたあと大阪の藤本さんから「中間報告で示されている時間割をみると家庭科の時間割が少なすぎはないか、実際、高校・中学ともに僅か二時間ずつの中でどれだけ学習が保証されるのだろうか」という懸念が出されました。

これに対し和田氏から、授業時間を思い切って削減しようという中で、家庭科を教科として置くことにまず全力を注いだ。高校の場合、僅か二時間というが、三カ年間で、共通教科は、保健6、家庭2、技術4、社会12、総合学習3だけで、あとはすべて選択である。中学で2×1というのは、毎週二時間を一カ年ということだが、運用の面で、隔週二時間を二カ年で学ばせてもよい。中学で技術は2×2となっている。せめて、技術と家庭を半々にしたかったが、力が足りなかった。時間の拡充は今後の課題と認識している。という

報告がありました。

そのあと、発起人の中から日教組にむけて具体的な要望……たとえば小学校の時から家庭科を正課として位置づけるとか、中学の2×1をもっとふやすとかの要求……を求めましたがそのへんの意見はまとまりませんでした。

総じて家庭科の教師も母親たちも現状の家庭科を何とかしてはという意欲は強いのですが、それでは具体的に制度の中にどう位置づけ、どう要求していくのかという段階になると、平常そういうことに不慣れだということもあって、なかなか簡単に入りこんでいけないという印象をもちました。(嶋田)

#### 教育課程審議会の動向

私たちは、昭和四十九年二月九日、東京都教育委員伊藤昇氏をお尋ねしてから、今年の十月一日東京大学教育学部教授東洋氏を訪問するまで、文部大臣永井道雄氏(三月十五日)をはじめ、教課審委員、都教育委員・家庭科指導主事を含めて二十一名の方にお会いし

て、会の職旨を訴えてきました。その模様はニュース各号でお伝えしてきた通りです。

教育課程審議会は、四十八年十一月二十一日発足以来、改訂の具体的方向について検討してきましたが、去る六月十三日の総会で、いままでの委員の他に、新しく現場教師や教育専門家が十九名加わって、①小学校低学年における理科・社会をどうするか ②算数・数学における小・中・高の教育内容の一貫性と水準 ③高校の教科・科目の構成・履修方法 ④総合委員会―授業時数・学習指導要領・教科書、の四つの課題別委員会を作り九月末までかかって審議、来年夏には答申案の中間発表、同秋には最終答申を行う予定ということです。

私たちが、各委員をおたずねして受ける手ごたえは、はじめのうちは、正面切って男女の特権をふりかざす方が多く、現在は女性が生きていく中心になっていくのだから、教育は社会の実態をふまねばならない。戦後の不十分な女子教育が今日の無責任な母親を生んでいるのではないか、というような意見が多かったのですが、特に今年になってからは、男女特性論はほとんど聞かれなくなって、男女共修の家庭科とは、どのような内容か、そ

れを示せ、そして、現在の家庭科教師で、その内容を教えられるか、また教員養成について調べてみたが、現状では、従来の家庭科を教える教師しか育たない。これでは覚えられないようにほこ先をかわされるようになってきました。十月一日には新しく委員になられた東洋氏を尋ねました。その様子は八頁に記しました。

世界のおごきから  
（半田）

私たちは、教育の中に男女差別があつてはならない。女も男も家庭生活については責任を持たなければならぬと考えて共修運動をすすめています。こうした考え方は、国際的にもはっきり打ち出されるようになって来ました。少し古いところでは、一九六七年一月に国連総会で採択された「婦人に対する差別撤廃宣言」第九条には次のように書かれています。

既婚、未婚を問わず少女と婦人に対し、すべての段階の教育において男子と平等の

権利を確保するために、すべての適切な措置がとられなければならない。

(a) 略  
(b) 施設が共学であると否とを問わず、同一の学課選択、同一の試験、同一水準の資格をもつ教職員、同質の校舎と設備。

(c) (d) 略  
また、今年六月のILO総会では、特に婦人労働者の問題が討議され「婦人労働者の機会と待遇の均等を促進するための活動計画」が採択されました。

その中の特に関係のある部分は次の通りです。

8 社会下部構造の強化

(1) 略

(2) 育児をはじめ、家事を家族全員により平等に分担させることを促進するため、必要かつ適切な場合には教育的、助長的な措置がとられなければならない。

(3) 略

11 一般施策

婦人労働者の完全な機会と待遇の均等を確実にするため、次の各項のための措置がとられなければならない。

(a) 略

### 会に寄せられた声の中から

私はずっと以前から、家庭科を男女共修にすることに賛成でした。それは、家庭の中の固定的な男女分担の役割を突き崩すためでもあります。それ以上に、結婚後の男女の理解と協同を实らせたいからです。したがって男の子にぞうきんを縫わせたりするようなことはどうでもよく、それ以上に本質的な女性を理解させることが重要であります。その意味で、私は、女性史を高校の必修科目にとり入れることを願っています。

（女性史研究家 村上信彦）

私が、食生活改善のための仕事を始めたのがちょうど二十年前、その時から家庭科の重要性を訴えてきた一人です。生活を大切にするという具体的な内容をしっかりと身につけさせる必要があります。これを男女ともに学ぶことは当然の理。これからの社会において、女子はもちろん、男子必修の実現は、ぜひとも早期に、と考えています。できるだけ毎日の

運動の中で協力いたします。会からは、もっと直接家庭の主婦への働きかけが必要であり、世論形成の上からも大切です。そういう意味では、消費者運動を積極的にするためのグループ、個人に対する呼びかけを強化するのとが、大きな力になるのではないのでしょうか。

（食生活改善研究会会長 八藤昌成）

女性が本当に人間らしく生きることへの種々の問題解決のために、全く無力な私ではありますが、「家庭科の男女共修をすすめる会」に連なり、ニュースを読ませていただいたというのを、せめてもの希望としております。ささやかなサラリーマンを夫に持つ、やりくり主婦専業の私ですが、娘達の将来のために、よき時代のくることを願って、この夏アルバイトで得た収入の一部一万円を、会に寄附させていただきます。

（静岡県 主婦 石井短子）

男子の選択者をまじえての共修家庭科を教えています。男子の授業態度はまじめ、栄養価の計算など、女子よりもよくやります。実習も熱心です。きらいな数学より楽しいと申しておりますし、これから先は、民法、家

族法、新しい家庭のあり方などを話し合いに、よってやっていくつもりで楽しんでいます。けれども、男子に家庭科を教えているというが、どのような形で何単位やっているのか、と県教委が教頭を呼び出して強力な指導をしたらしく、大分もめました。教委のいうには「家庭一般は女子必修で四単位であるので、男子もこれに準ずべきである。従って、男子の選択の家庭科の単位を認めることはできない」というのです。この件については、組合でも取り上げることになり、いずれ当局と話し合う機会もあるかと心待ちにしています。

（大分県立高校 M・W）

高校時代「家庭科を男女共修に」という運動をやりました。その時、歴史は根強く社会通念はちょっとやそっとで変わらないが、若い人には期待が持てそうだと思います。「男は外、女は内」の論理は、所詮は男のエゴ、女の甘えに過ぎないと思います。「うちの亭主は何もしない」という前に、なぜ本気で「やらせる」ことをしないのか。夫・息子に日常的な実践面で変わらせるために、妻・母親・恋人たる女性に重大な責任があります。

（会社員・関西大学学生 川島真帆子）

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 会 計 報 告 と お 願 い 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

長らく会計事務をストップさせて頂いておりましたが、ようやく再開致しましたので、とりあえず前年分の決算と今年の仮集計を計上致します。

前年はごらんのように、皆様多数のご支援により、まことに健全財政をすすめることができました。運動発展のバロメーターと関係者一同心から感謝致しております。

ところで、今年度は改めてカンパ頂いた方多数おられるのですが、何分無理をしてパンフの第二号「男女共修の家庭科で何を教えるか」を出しましたので、すでに残高が心細く、また今度郵便料が値上り致しますので、特にカンパのご協力をお願いしたく存じます。

なお、ニュースを何部か売って頂くと、パンフレットを何冊か引き受けて下さるというカンパのし方も歓迎致します。お申し出下さい。送金先は、都内の方は同一銀行から送金頂けば手数料無料です。(協和銀行新宿西口支店 普通預金七〇二二四九)

それ以外の地域は、郵便局の振替がおトクです。(東京 一九一八九一)

(佐藤)

会 計 報 告 その1

(48. 12. 8 - 49. 12. 31)

収 入 の 部		支 出 の 部	
発起人搬出基金	90,000円	通信案内費	141,430円
カンパ	661,479	印刷代	142,630
(含ニュース購読料)		講演料行事費	66,380
ニュース売上代金	11,660	事務用品費	11,575
その他	36,642	資料代	3,300
		その他	66,870
		(含、京都・長野資料代立替)	
計	689,781	小 計	432,185
		パンフレット 1 立替	117,060
		合 計	549,245
		差引残高	140,536円

その2 今年度会計仮集計

(50. 1. 1 - 9. 5)

収 入 の 部		支 出 の 部	
カンパ	412,521円	ニュース発行・送付	152,520円
ニュース売上	22,100	集会費用	26,900
資料売上げ	1,200	その他の印刷代	9,400
その他	40,355	その他の通信費	17,270
		事務費(含アルバイト代)	85,300
		その他	2,000
計	476,176	計	293,390
パンフレット 1 返却	110,310	パンフレット 2 立替	256,000
合 計	586,486	合 計	549,390
		差 引	35,096
		前年度くりこし	140,536
		残 高 計	175,632

労働、家庭および社会における男女の役割に対し、依然として広汎にゆきわたっている因習的な態度を転換すること。

同時に採択された「婦人労働者の機会および待遇の均等に關する宣言」では、次のように述べられています。

第四条 労働生活、家庭生活および社会生活における男女間の均等を奨励し確保するような世論を育成し、社会的風潮を促進するために、すべての措置がとられるものとする。

更に、七月の国際婦人年世界会議では「マニラ宣言」「世界行動計画」それに三十四の決議が採択されました。

その中の関連部分をご紹介します。

5、男女は、家庭および社会において平等な権利と責任を有する。男女間の平等は、社会の基本単位であり人間関係涵養の場である家庭において保証されるべきである。男性は、家庭の健全な発展のために、家庭生活により積極的、創造的かつ責任ある態度をもって参加し、もって婦人が社会の諸活動により多く参加することを可能にし、両性の家庭と職業の可能性を効果的に連繫す

べきである。

世界行動計画

16 男女平等の達成とは、両性がその才能及び能力を自己の充足と社会全体のために発展させる平等な権利、機会、責任をもつべきことを意味する。そのため、家庭及び社会の中で両性に伝統的に割当てられてきた機能及び役割を再検討することが肝要である。男女の伝統的な役割を変える必要性を認識しなければならぬ。婦人をあらゆる社会活動に同等に参加させるためには家事の負担を軽減するような社会的に組織されたサービスが設立、維持され、特に子どものためのそれが提供されなければならない。家庭と子どもについて、男女の共同責任が受け入れられるためには、主に教育を通じ、社会通念を変えるためのあらゆる努力が払われるべきである。

81 教育及び訓練の計画、カリキュラム、水準は男女について同一のものとしなければならぬ。両性を対象とする教科課程には、一般科目の外、工業・農業技術、政治・経済、社会の時事問題、親としての責任、家庭生活、栄養及び保健を含むべきである。第二委決議18、教育と訓練

1. 下記事項を確言する。

(1) (5) 略

(6) 男女が相互に一層現実的な認識を形成するように、あらゆる段階で同一の教科課程を履修し得るようあらゆるレベルでの共学を確立すること。

(7) 全ての教科課程から性に関する偏見を排除し、男女の役割を典型的に考えることに對する批判的な分析を含めること。

2. 各国政府に対し、下記の事項を勧告する。

(1) (4) 略

(5) すべての教材から性に関する偏見を排除し、差別的な態度を改革するようなものとする。

(6) (8) 略

これらは、政府や個人に対し直接的拘束力を持つものではありませんが、政府をはじめ民間団体も個人も、その精神を尊重し、これらの事柄が実現されるよう努力しなければならぬものです。

私たちがこの精神に従い、家庭科の男女共修を一日も早く実現させるよう努力したいと思います。

(梶谷)

## 家庭科の核に「生活の科学」を追究

### ―教育科学研究大会 での家庭科研究―

教育活動の基本に教育科学の確立を求めて戦前から活動をもつ教育科学研究会が、第十四回の大会を八月十日～十二日まで伊豆長岡温泉で開きました。

家庭科教育については、提案者の村田泰彦氏（神奈川県大学教授、大学家庭科教育研究会主宰）らによって、「生活科学と教育」の分科会がもたれました。そこでは、昨年までの家庭科教育分科会を継承しつつも、家庭科という教科の核に、生活科学を求めたというわけであるかという仮説的研究が試みられたわけです。日程はまず第一に、従来の生活科学の概念あるいは、戦前の教科研における家事研究等の中から、家庭科教育の寄りどころとなる新たな生活科学の概念とその教育実践への展開はどのように可能なのかを探ってゆきます。そして、第二に、小・中・高の具体的な実践を通して生活科学とは何か、生活科学を核に

した家庭科はどのようなものかを検討してゆきました。（分科会の報告は、国土社刊雑誌「教育」の夏期教研特集号が出ますのでお求め下さい。）

約三日間にわたる分科会の討論の紹介はともできませんが、男女共修の方にも興味をもって頂ける点を一、二ご紹介します。

そのひとつは、中学校段階での教科研究が岩手大付属中の滝沢孝子氏や山梨県巨摩中の小松幸子氏らによって、かなり体系化してきていることです。両者はいずれも、生活を学ばせることを、「人と物とのかわり」を軸にすえて、人間の欲求や生活行為と物との関係、物の性質、生活を発展させる技術や道具・機械の意義等を視点におきながら、人が物とかかわってどんな生活をきずいてきたのか、その必然性と矛盾はどこにあるのかを、わかりやすい題材で教材化しようと試みています。しかし残念ながら、この視点を高校段階へ持ち出すことには様々な問題があって、むずかしいものと思われました。

一方、高校の共修実践は、かなり集団的研究が行われた分野ですが、単位数が少ないこともあって、生活の問題を意識化することには成功していますが、科学性・系統性までは

十分手が伸びない授業構成になっていることが、今後の課題であるように思われました。しかし、いずれにしても、教科論確立への追究が、様々な場面で進められていることは、男女共修運動にとっても心強い背景と受け取れました。（佐藤）

### 諸会合や活動から

第十回全国集会在8月6・7・8の3日間にわたって東京大学と真成館（本郷）を会場にひらかれ、沖縄をふくむ全国各地から約四五〇名が参加しました。

初日の記念行事は、構成・家庭科教育一〇〇年と講演、川合章氏（埼玉大）の「家庭科の教育的意義をさぐる」でしたが、このテーマはまた、本大会の主題でもありました。参加者は現場教師が主流で、研究者・学生も加わっていましたが、全体の約半数は高校、のこりを小・中学校で切半といった構成でし

た。また、初参加者も多く、自主研究のベテランから文部省の研究員までというように多様でした。

初日の午後は、授業研究と基礎講座が飯野こう（大野田小）舟越立子（文京十中）畑沢セイ子（日体柏高）坂本智恵子（別府大）田中恒子（奈良教育大）時得捷子（都立大島高）向山玉雄（産教連）丸岡玲子（西新井小）半田たつ子（家政教育社）さんらによって、いっせいに開講され参加者は選択に迷うほど充実した内容が報告、提案されました。

男女共修の家庭科で何を教えるか分科会を担当された半田たつ子さんの提案とパンフには参加者から大きな関心が寄せられ、京都からは実践の貴重な経験が出されました。

第二日目は、小・中・高別の分科会で、提出された21の実践報告を題材にした交流と、テーマにそった討論が展開されました（くわしくは機関誌「家庭科研究」36号をごらん下さい）そのなかで、子どもたちがいっそう学習意欲をなくしてきていること、手足を動かす「労働・技術的経験」が乏しくなっていること、教師の教育意図と子どもの受けとめ方との間の屈折が増えてきていることなどが共通して報告され、家庭科の教育的意義を

把握すること自体のむずかしさを痛感させられました。

第三日目は、日教組「中間報告」を素材にして、総合的な討論が行われたあと、参加者の感想発表があつて大会の幕を閉じました。（和田）

### 母と女教師の会から

八月九日、十日、炎暑の中を、全国母と女教師の会が開かれました。

一日目は九段会館で全体集会、二日目は戸山高校で分科会が開かれました。

全体会では、中教審路線の進行の中で、母と女教師が手を結んで教育の課題を果していくためのシンポジウム（星野安三郎・高田なお子・樋口恵子の三氏による）を中心に話し合いがもたれ、分科会は、①子どもの成長と発達を考えよう②「国民の教育要求と教育政策を考えよう」③「母と女教師の連帯活動を考えよう」の三つのテーマを柱に二五分科会に分かれて討論が行われました。①と③では各地の具体的な状況報告と、運動の報告が中心でしたが、家庭科共修の問題は②のテ

ーマで取りあげられました。私たちの会の賛同者でいらっしゃる星野安三郎氏が助言者として出席された分科会では、特に女子教育政策への批判として共修の問題が話しあわれ、先生も私たちの運動のことを取りあげてくださったそうです。私も自分の参加した分科会で、家庭科共修を訴えましたが、全体にどの分科会でも話題になるといったひろがりはないのが残念。なお、両日とも、会の一問一答集などを販売して参加者に私たちの運動をアピールしました。（駒野）

◇◇◇会の第二号パンフレット◇◇◇

「男女共修の家庭科で何を教えるか」について  
―中学・高校実践例を中心に―

定価 二〇〇円  
送料 五五円

九月半ば、朝日新聞に、小さな紹介記事が載ったところ、日本全国から手紙や電話で、内容を知りたいから送ってほしいとの注文が続々届き、うれしい悲鳴をあげています。なお、このパンフの13頁を次のように訂正いたします。よろしく願います。

筆者阿部八重さんの肩書きを削り、  
本文一行目「府高家庭科研究会」を  
「大阪府高家庭科研究会」とする。

教育学部教授）を訪ねて

いと言われた。

原因としては家庭科の教師の問題があつた。たとえば家庭科で技術の奥にある精神とか、住居や環境に対する検討がころみられ、日本の歴史的なもののからそのようなものが摘出できるというところまで、家庭科という教科の内容が深められてゆくのなら大賛成なのだ。が、そこまで追求できる家庭科の教師がいるかどうか疑問であること。教科の内容を深めてゆくためには教師の再訓練を徹底的にしなければならぬし、まずそこから始めるべきではないのか。そのことに對して、男女共修

の家庭科になれば必然的にあらたな内容検討がなされるはずだと意見を言うのと、即座にわかった、内容の変革を前提とした家庭科の男女共修なら賛成であると言い、現在の家庭科の授業を見ているとどうも職業教育に思えてしかたがない。だから選択科目にすべきだと考えていたと言われた。それから重要なのは家庭科が技術を無視した内容教科になるのだったら、むしろ家庭科という教科はなくして社会科の中に包括すべきだと思いが、教課審の委員の中には男女の役割を現在よりもっと強化しようという考えのひとたちもいるから、家庭科という教科はくなくならぬだろうし、選択科目というかたちにもならず、やはり女子必修ということが存続されるのではないか。だから現在の家庭科の内容を変革するということかたちでの男女共修という家庭科の実現は難しいのではないかと思うこと。ただ個人的な意見としては男女共修にすることによって家庭科が向上してゆくことには賛成だからがんばって欲しい。行動面では何の協力も出来ないが、家庭科の教師の中にはゆきずまり意識を持ったひとたちが多いから、家庭科をいものにさせてゆく可能性はあると思いますよ、と言われた。

(落合)

<p>❀ 10 ・ 1</p> <p>教課審委員 東大教授東洋氏訪問 (半田・梶谷・落合)</p>	<p>❀ 9 ・ 16</p> <p>差別学習の場を平等に与えよ」 半田執筆</p>	<p>❀ 9 ・ 6</p> <p>家庭科」講師和田典子氏ほか 東京新聞「教育ひろば」に「男女</p>	<p>❀ 8 ・ 22</p> <p>NHKラジオスコープ「家庭科の 男女共修」(塚本)</p>	<p>❀ 8 ・ 20</p> <p>新潟日報、信濃毎日、22日京都 新聞に「母親大会分科会から 教 育のなかの男女差別」家庭科を共 修制に」掲載</p>	<p>❀ 8 ・ 17</p> <p>18 母親大会でパンフ、実践例を 売り署名集めする</p>	<p>❀ 8 ・ 11</p> <p>発起人会 ニュース167送る</p>	<p>❀ 7 ・ 30</p> <p>「男女共修の家庭科で何を教えるか」 1 中学・高校実践例を中心に1出 来上がる</p>	<p>❀ 6 ・ 21</p> <p>第八回討論集会「憲法と家庭科教 育」講師星野安三郎氏</p>	<p>❀ 6 ・ 18</p> <p>実践資料集に関する打ち合わせ会 発起人有志</p>
---	--	---	--	---	--	---	--	---	--